

「孤立」から自立へ  
—— 20 と 21 世紀超高齢者と長寿変数 ——

神 江 伸 介

はじめに

第一章 20 世紀から 21 世紀にかけての超高齢者の政治行動の変化

- (1) 投票等と政治参加
- (2) 党派方向

第二章 超高齢者の集団加入

第三章 超高齢者の政治コミュニケーション環境

- (1) 1 世代同居超高齢者のみ突出する第一パターン
- (2) 1 世代同居と単身者の間が連携する第二パターン
- (3) 単身超高齢者のみの第三パターン
- (4) 3 世代同居者が主たる受け手となっている第四パターン
- (5) 3 世代同居と 1 世代同居が連携する第五パターン
- (6) 何の特徴もない第六パターン

第四章 超高齢者の争点関心

- (1) 超高齢者は単一争点派とは単身者にのみ言えること
- (2) その他の争点との関係—争点のよみがえり
- (3) 特殊な争点

おわりに

## はじめに

20世紀から21世紀になって、高齢者の量的増大などが論じられるが、高齢者内部の構成が問題となることが少ない。まして、内部の問題がどのようなにして社会、政治の問題につながってゆくかが議論されるのはまれである。<sup>(1)</sup>

21世紀の超高齢者は、種々の点でそのあり方が20世紀と異なっている。その点を量的な面で確認したい、というのが本論の第一の目的である。本論では、この超高齢世帯を取り上げ、質的分析でなく量的分析を行う。更に、高齢者一般ではなく60から69歳、70から79歳、80歳以上を取り上げて、60以下を非高齢者、以上を前期高齢者、70歳以上を高齢者、80歳以上を超高齢者と名づけて分類する。特徴づけは主に超高齢者においている。単身高齢者は、3世代、2世代、1世代（高齢者夫婦のみ）、そして一人というふうに解体していく究極の形を反映しており、まだ現在進行中であり、前回の論文でその単身超高齢者の分析をやってみた。<sup>(2)</sup>今回は、その高齢者（3階層）全体を分析の対象としたい。

更に、超高齢者が各種政治行動でユニークな行動を示しているかものはっきりさせないといけない。投票行動、集団加入、政治コミュニケーション上の環境、争点意識、について個別具体的にあきらかにしてゆかねばならない。

まず実数の面で確認しよう。

「**図1 超高齢者の孤立化傾向**」では、20世紀データと21世紀データを超高齢者で比べてみると、3世代同居のものが顕著に減り、2世代同居＝核家族が増え、超高齢者夫婦のみを主とする「1世代」同居において増

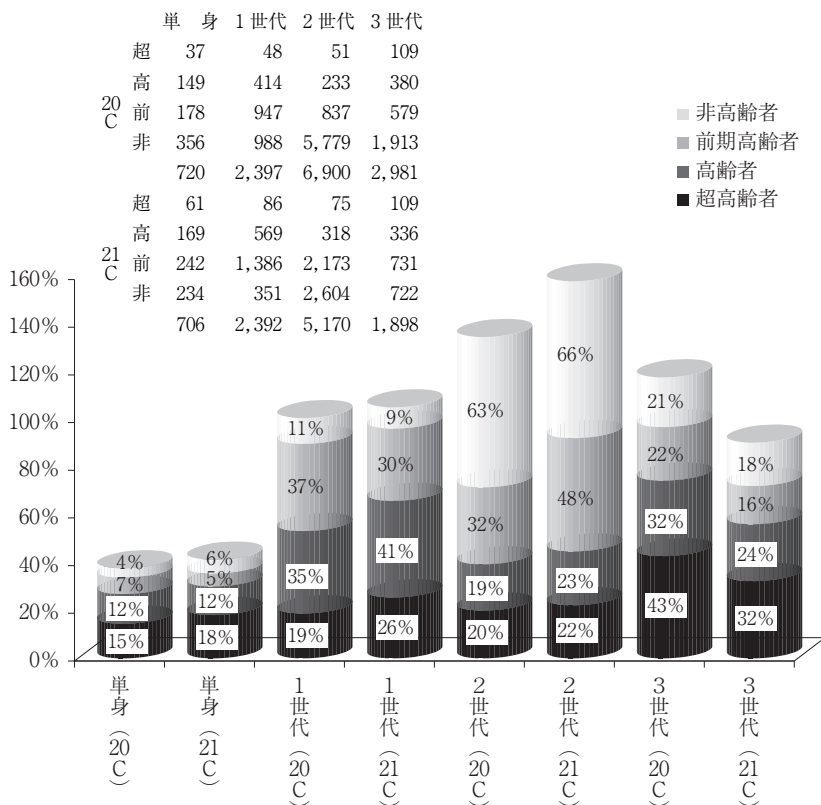
---

(1) この論文のこれまでの論文との違いは、新しい変数で1990年から一貫して聞かれている項目で、かつ2000年代のデータを加えたものを分析した。

(2) 高齢者全体を意味する。

(3) 河合は、孤独が主観的なもので、孤立が客観的なものとしている。同書、69頁。

図1 超高齢者の孤立化傾向



え、そして単身超高齢者の増加と続くのである。

本論で強調したいことは次の点にある。長寿というものが年齢や家族などと同じく独立変数であり、その独立変数に差し掛かったものは様々な利益を受ける。それは、投票率を高め、政治参加（演説会、機関誌購読度）を部分的に維持する。

第二に、著者が以前分析したところによると、<sup>(4)</sup>83年で65歳、96年で

(4) 『政治老年学序説』2005年。

75歳、より後で投票が不活発化するというのが、2000-2005年で80歳より後で不活発化するという事実と照合すると、この変数の規則的な性格がわかる。長寿変数は、多分平均年齢の伸びと合わせ上方に伸びてゆき、各種の態度をそれ以前の態度とそんなに変わらなくして<sup>(5)</sup>いっている。

最後に、紛らわしいが現在適当な言葉が見当たらないので、気をつけて読んでおくものとして、「一般的な高齢者」と「カテゴリーとしての高齢者」である。ここでは、前者を「高齢者（3階層）」、後者を「高齢者」と書き表す。それから、「○世帯」と答えたものを「○世代同居」と呼ぶ。家族は、1世代に向かっており、3世代以上は縮小していることから、1世代を現代家族、3世代を近代家族と呼んでおこう。

## 第一章 20世紀から21世紀にかけての超高齢者の政治行動の変化

ここでは投票と投票方向の二つの面に分けて論じてみる。

### (1) 投票等と政治参加

まず投票・棄権行動（「**図2, 3 超高齢者の投票—20世紀, 21世紀**」）を見てみよう。

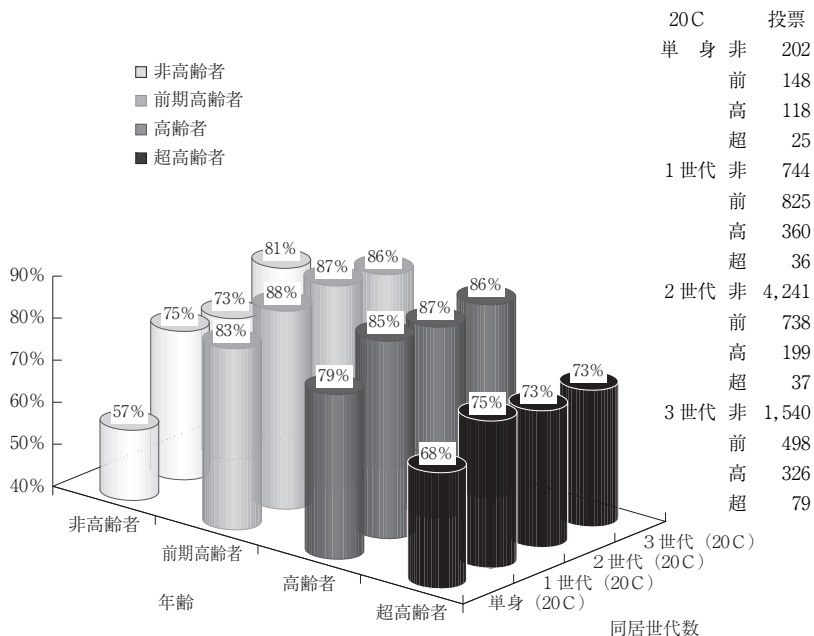
20世紀でも21世紀でも1世代から3世代まで投票率はほぼ同一である。しかし、単身ではかなり異なっている。これは、家族に囲まれていれば全員ほぼ同じ投票参加になるが、単身はその影響がないので単身高齢者（3階層）としての純粋な値を示してくる。

ところで、非高齢者から高齢者にかけての全世代に渡る投票・棄権の特徴は、20世紀データでは持っていたが、21世紀データになって変わっていった。

---

(5) 高齢者（3階層）と書く場合は、前期高齢者、高齢者、超高齢者を総称している。

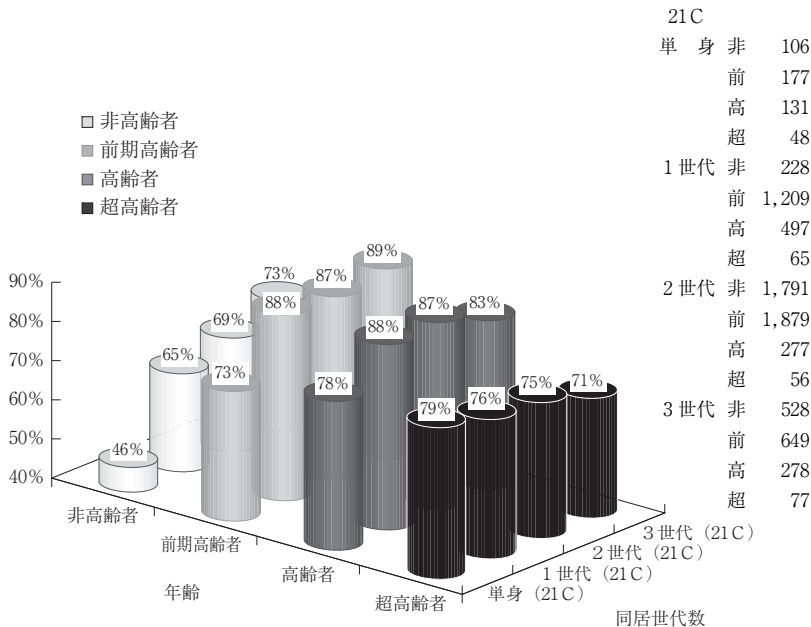
図2 超高齢者の投票—20世紀



20世紀には「一人暮らし」でいえば、非高齢者と高齢者（3階層）の間には夥しい違いがあり、図にみるように26ポイントも異なっている。次に前期高齢者と高齢者は人生で最も投票率が高い時期で83と79%を記録する。そして、超高齢者とここで名付ける時期になると、11ポイント低落する。形として、**逆U字型**（右側の長さは非高齢者の半分の長さ）という形であった。いわば、低投票率層を多く含む若年層を含め投票外関心が高い非高齢者層、投票経験の長さなどが累積し人生最高の投票率を誇る60歳代、70歳代が来、そして疎外感が昂じる衰退の超高齢者の時期が来る。

21世紀になると、事情がすこし変わってくる。図では、単身者のみを見ると、投票に参加する者のうち、非高齢者と前期高齢者が下がり、超高齢者が上がっている。前の現象は、全体としての投票率が下がっていることと、長寿化とともに前期高齢者が次第に非高齢者の列に編入されつつあ

図3 超高齢者の投票—21世紀



21C	
単身非	106
前	177
高	131
超	48
1世代非	228
前	1,209
高	497
超	65
2世代非	1,791
前	1,879
高	277
超	56
3世代非	528
前	649
高	278
超	77

ることを示す。後の現象は、超高齢者の部分が跳ね上がり高齢者と全く同一となってしまった。超高齢者は、投票もやるようになったのか。半分は真実で、半分は誤りであろう。長寿化し、高齢者と同じレベルで習慣的投票行動をやっている、というのが第一点。しかし、果たして、それでは90歳代になれば、以前の80歳代の現象を示しているのか。いまの時点では何とも言えない。<sup>(6)</sup> いずれにせよ、この段階の形は、180°反転のL字型である。

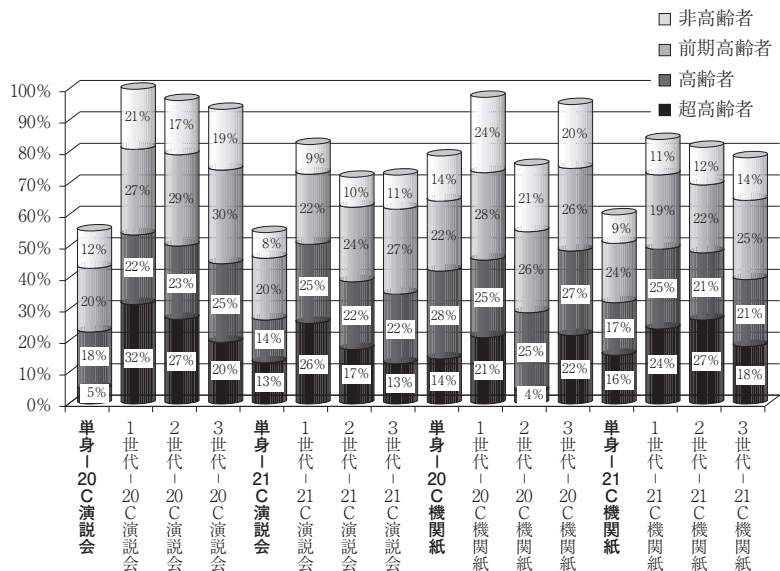
一七九

(6) 因みに現在のデータで90歳以上の者を超々高齢者として区分すると、単身超々高齢者の数は、20世紀データで1名おり棄権、21世紀データで2名おり投票であった。そこで、まだ新しい分類で分析できないが、意外と想像外の傾向を単身超々高齢者は持っているのかもしれない。最高年齢があまり進まず、政治で関与している度合が年齢が高くなると、きわめて理想的な形である。ただ、多くの超々高齢者は、高い棄権率を持って「家族で」暮らしている。

更に、投票以外の参加について「**図4 超高齢者の演説会と機関誌購読**」を次に見てみたい。そうすると1つの妙な傾向に気づく。演説会については、20世紀には12-20-18-5%と逆U字型であったのが、21世紀になると、8-20-14-13%という形で、辺びな形だが、逆L字型になっている。「議員依頼」を省略して「機関紙購読」を見てみよう。<sup>(7)</sup> 20世紀に14-22-28-14%だったものが、21世紀では9-19-17-16%である。ここでも、今度は20世紀はきれいな逆U字型になっているのに対して、21

図4 超高齢者の演説会と機関誌購読

	単身 -20C	1世代 -20C	2世代 -20C	3世代 -20C	単身 -21C	1世代 -21C	2世代 -21C	3世代 -21C	単身 -20C	1世代 -20C	2世代 -20C	3世代 -20C	単身 -21C	1世代 -21C	2世代 -21C	3世代 -21C
演説会	20	107	510	189	19	33	248	78	24	119	620	195	21	39	306	96
前高	17	123	120	92	47	307	514	197	18	124	104	80	45	324	463	181
超高	13	45	27	47	23	142	68	74	19	49	28	49	28	143	67	70
機関紙	1	6	7	11	8	22	13	14	3	4	1	12	9	20	20	19



(7) 議員依頼はほとんど政治参加としての意味をなさない。

世紀になると、高齢者が相当落ち、単身超高齢者が少し値を上げることで前期から超高齢者までなだらか（逆L字型）になった。単身のみの年齢別に見てみれば以上の通り。

このような、U字型から逆L字型に変わった理由は、二つのファイルの半分の値である7.5年の間に平均寿命が延び、それに応じて超高齢者は高齢者の態度を持ちながら80歳代に競りあがったからといえる。超高齢者はもはや20世紀の超高齢者とは異なる存在になったといえるだろう。

この形態はあと数十年単位で、平均寿命を延ばしながら、まだ当分続くであろう。ここで、投票率に関してのみまとめておこう。

第一に、世帯数にかかわらず、20世紀のデータは、世帯で暮らす者のうち高齢者と超高齢者はほとんど同じ投票率をあげているのに対し、単身高齢者が高齢者で6%、超高齢者で7%、減らしている（図を年齢別に見る）。20世紀の前期高齢者においてはほとんど同じ投票率である。それに超高齢者において世帯数にかかわらず10%ほど投票率を落としている。超高齢者層には、まだ長寿変数が来る前は、単身であるか、今いくつであるか、の二つの力が加わって、投票率に不利に働いた。

第二に、非高齢者をもっと面白い行動を示す。非高齢者の参加は、単身者－1世代－2世代－3世代と移るにつれ投票率が漸次上がり、3世代目の投票率はほとんど高齢者平均と変わりがない。世帯の世代数が影響をあたえる＝投票率を一致させる、好例と言えよう。

第三に、21世紀のデータでは、逆に、世帯の世代数が、投票率を押し下げる方向に作用する。21世紀データの、特に高齢者と超高齢者部分を見ると、3－2－1世代と上昇してゆき、超高齢者では単身者が最大の投票率をあげている。非高齢者の家族形態が与える影響は同じであるが、世代数の影響があるのか、さらに押し下げている。

かくて、超高齢者の投票率を上下させる要素は、加齢、家族の世代数、を考慮することができるが、そこに介在しているのが、「長寿変数」のようなものだろう。対象となっているのが15年間（1990～2005年）であり、



その間に男が2.64歳、女が3.62歳長寿となった。<sup>(8)</sup> この変数は今のところ確たることは言えないが、単なるライフサイクルに応じて年を数える加齢変数や、世帯数といった独立変数を上回る最も強い変数である。

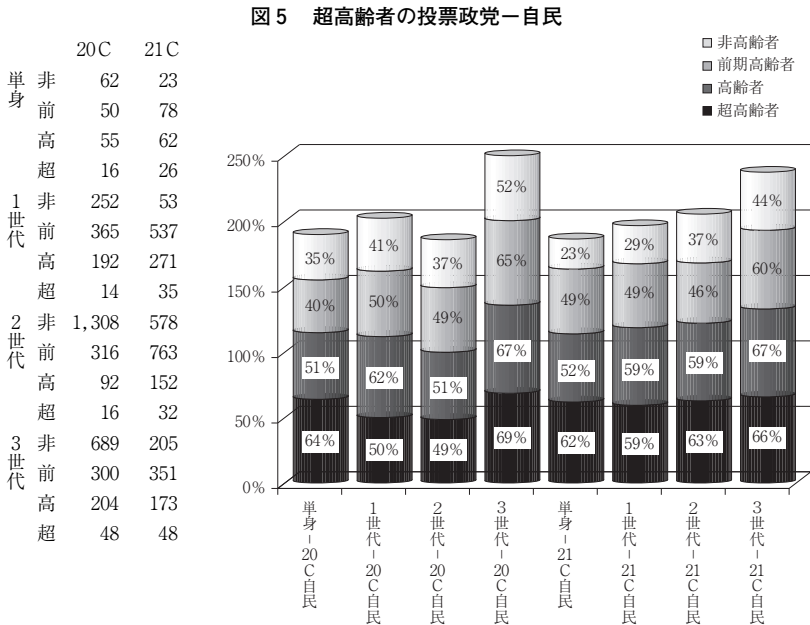
## (2) 党派方向

次は、投票方向等の行動へ偏りをもつもの、いわば行動の内容を構成しているものである。まず、投票政党から接近してみよう。

### 投票政党

「図5 超高齢者の投票政党」を見ていただきたい。

20世紀と21世紀の違いは、20世紀の場合単身者が加齢に従って自民党投票を加えてゆき（35～64%）その傾斜は激しいものがあるが、しかし前



(8) 厚労省，日本人の平均余命。

後をみると「漸増」というのが適切である。これに反して、超高齢者の1, 2世代同居は著しく自民投票は低（50, 49%）だった。

21世紀になると、まず、非高齢者と高齢者（三階層）との間に自民投票が26票（20世紀は僅かに5票）もの差で広がるようになった（世代間差異）し、これは所帯数の違いは関係は薄かった。

この自民化は3世代同居のところでも最高に達する（前期60%、高齢者67%、超高齢者66%）。しかしもともと3世代同居ではこの傾向を持っていた。

もともとの傾向ではなく、1, 2世代同居のところでも自民党投票（1世代59%、2世代63%）を新しい行動原理として現したことに注目しよう。そのことによって、単身者－1世代－2世代と自民に値がそろって並んだのである。

### 政党支持

これは投票政党である。棄権層などの指向を考慮に入れるため政党支持を見てみよう。「図6, 7, 8 超高齢者の政党支持の変化－自民党, 社会・民主・他, 支持無し」を見る。

自民党支持の高齢単身者（3層）の内、全員が自民党支持を減らしていたが、超高齢者のみはその支持を5%と一番減らしている<sup>(9)</sup>。

ほとんど変わらないのが2, 3世代同居者である。これは、多分同居世代が多いものほど古い慣習を反映しているのだろう。

一番自民化を進めるのが1世代同居者であって、驚くことに45%から57%と12票も自民化を進めた。

社会・民主系では、高齢者が逆に減らしているところに、単身超高齢者は9票も増やしている。その次に、非自民化をしたのは2世代同居者である。彼らは6票20世紀より非自民化した。3世代同居者は変わらず、1世代同居者は7票も自民支持化している。

---

(9) 単身超高齢者の場合、政党支持で革新に向かいやすい。

図6 超高齢者の政党支持の変化—自民党

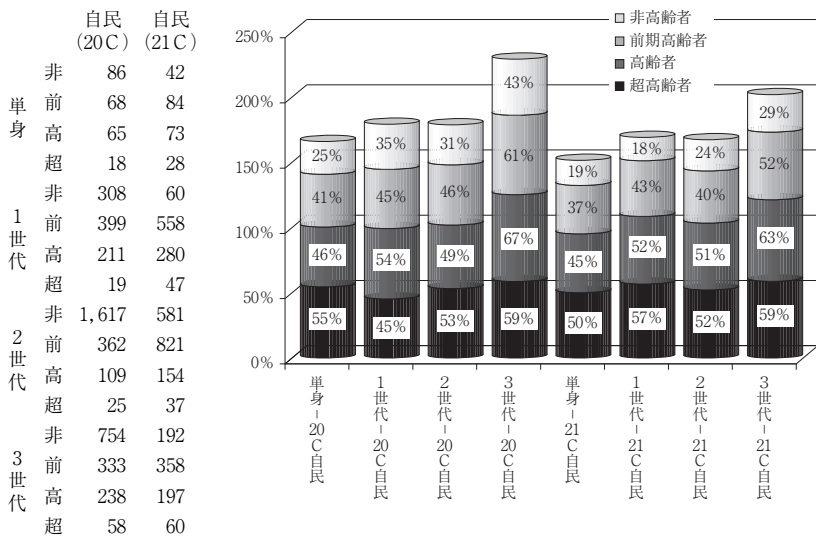


図7 超高齢者の政党支持の変化—社会・民主・他

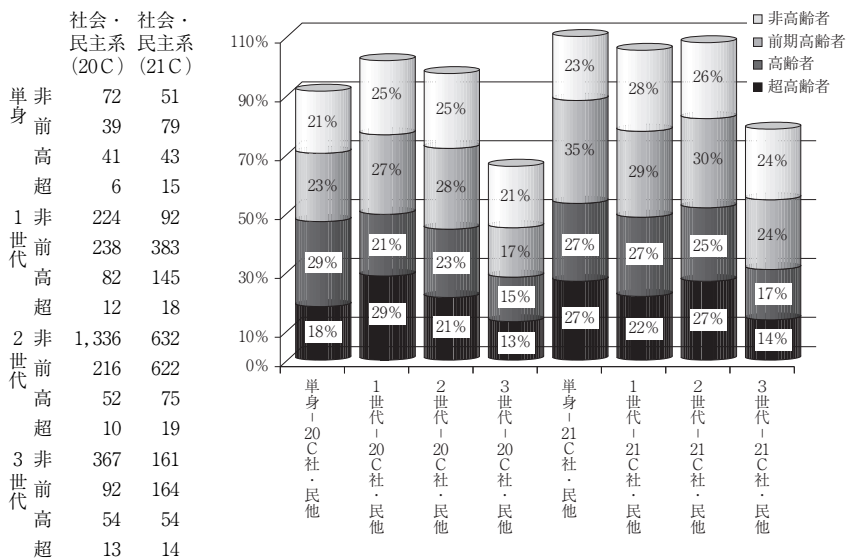
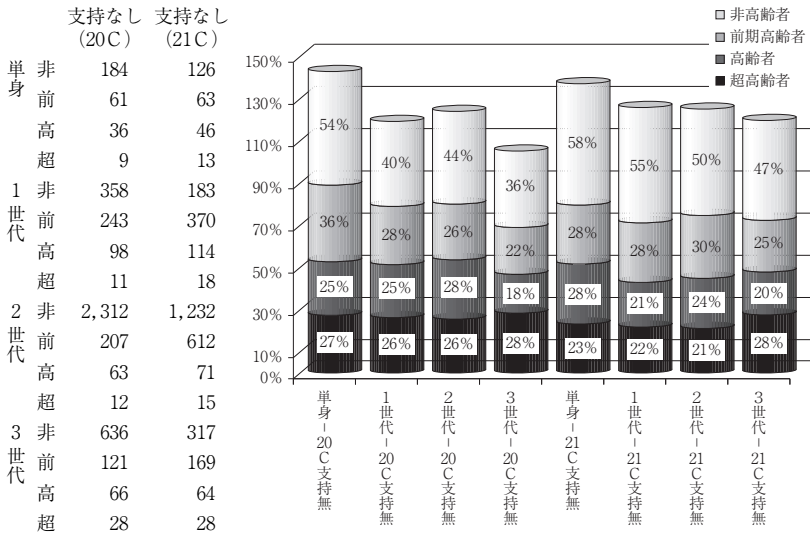


図8 超高齢者の政党支持の変化—支持無し



支持なし（単身）は、高齢者が3%増やしている中で、超高齢者は非支持なし化を選んでいる。非高齢者の場合、4%の支持なし化である。

以上まとめると、単身超高齢者の場合、他の高齢者を押しつけて自民であったが、最近の超高齢者は社会・民主系で、しかし非支持なしである。1世代同居は、21世紀には唯一20世紀時点からより自民党支持が増える形で自民化した階級とここでいえる。

## 第二章 超高齢者の集団加入

こちらの場合も、スペースの関係上、「加入無し」も入れて、集団加入第4位までを分析の対象とした。集団は、「町内会等」、「老人会」、「趣味の団体」と加えて「加入無し」である。結果は、「表1 集団加入—20世紀、21世紀データ」に示してある。それから、対比を明確化するためにここと第三章では2世代同居は省いている。

表1 集団加入—20, 21世紀データ

	町内会等 — 20 C 単	町内会等 — 20 C 1 世	町内会等 — 20 C 3 世	町内会等 — 21 C 単	町内会等 — 21 C 1 世	町内会等 — 21 C 3 世	老人会 — 20 C 単	老人会 — 20 C 1 世	老人会 — 20 C 3 世	老人会 — 21 C 単	老人会 — 21 C 1 世	老人会 — 21 C 3 世
非	33% (111)	69% (650)	67% (1242)	6%	29% (15)	36% (101)		0% (2)	1% (10)			
前	68% (115)	82% (751)	71% (400)	37% (90)	55% (765)	53% (386)	12% (14)	13% (80)	23% (78)	6% (14)	7% (91)	8% (60)
高	57% (83)	77% (308)	61% (224)	37% (63)	55% (313)	39% (130)	41% (41)	43% (117)	55% (122)	37% (63)	30% (173)	46% (153)
超	49% (17)	62% (29)	43% (46)	31% (19)	54% (46)	30% (33)	44% (11)	41% (13)	61% (35)	41% (25)	45% (39)	53% (58)
	趣味 — 20 C 単	趣味 — 20 C 1 世	趣味 — 20 C 3 世	趣味 — 21 C 単	趣味 — 21 C 1 世	趣味 — 21 C 3 世	加入 無 — 20 C 単	加入 無 — 20 C 1 世	加入 無 — 20 C 3 世	加入 無 — 21 C 単	加入 無 — 21 C 1 世	加入 無 — 21 C 3 世
非	12% (41)	13% (120)	19% (345)	9% (21)	7% (23)	14% (100)	51% (182)	22% (213)	15% (290)	74% (172)	58% (203)	33% (240)
前	12% (21)	17% (152)	16% (91)	12% (28)	19% (257)	16% (118)	28% (49)	14% (129)	16% (92)	50% (121)	29% (402)	23% (171)
高	12% (18)	17% (66)	17% (62)	14% (23)	15% (85)	17% (57)	27% (40)	14% (58)	18% (68)	28% (47)	26% (147)	21% (70)
超	14% (5)	6% (3)	9% (10)	3% (2)	11% (9)	8% (9)	35% (13)	27% (13)	29% (32)	43% (26)	24% (21)	33% (36)

町内会等であるが、20世紀では1世代同居を除いて、他の2グループは、40%台であり、これはそのまま21世紀の10%強の低下をもたらした(31-54-30%)。また超高齢者夫婦のみの世帯が強く町内会で働くことに価値をおいているということを示している。

老人会が、超高齢者でクライマックスに達する勢いである。20世紀で単身から1世代同居まで40%台、更に21世紀でもほとんどパーセントは変わらないという点である。そして一番の加入者は3世代の家庭に暮らす

超高齢者である。20世紀は61%と他と20%の差を付けており、21世紀でも53%と10%の差をつけている。その下の高齢者でも、3世代同居が、超高齢者ほどはないものの、20、21世紀の差は約10%の差を持って有意である。2番目の加入者は1世代同居のグループであり、しかも21世紀に加入増をもたらしてである（20世紀41—21世紀45%）。

「加入無し」に移ると、単身者において21世紀に地域団体を中心とした低下が加入無しの決定的原因となって21世紀の「加入無し」を大いに低下させた（20世紀35—21世紀43%）。ところで、超高齢者の「加入無し」についても、3世代のものが1世代を追い上げており、差が近接する。ここに、現代家族と近代家族の家族主義が一致する接点を見る。

最後に、ここで暫しデータを縦に見てみると、一般に、地域団体の解体が非高齢者に先鋭に現れ高齢者（3階層）の順にしたがって弱く現れるものといえよう。

老人会のみが強く超高齢者に、弱く高齢者に、与える意味付けは35%から43%へと所属集団の他のカテゴリー（「加入無し」）で削減影響を与えるのに対し、反集団主義の影響に対して「鈍感」で、強健なボランティア組織であることを示している。

### 第三章 超高齢者の政治コミュニケーション環境

以下、①言論による選挙運動、②文書による選挙運動、③メディアによる選挙運動、④選管による選挙運動、⑤インフォーマルな選挙運動は、今回の分析ではあまり重要な役割を果たしてないので括弧の中に入れておいた。ただ、分析の結果6パターン出てきたものの元はどういう並びであったかを知るといことは思考の順序として意味がなくもない。

数字の（○—○—○）は、単身—1世代同居—3世代同居のパーセントを並べたものである。

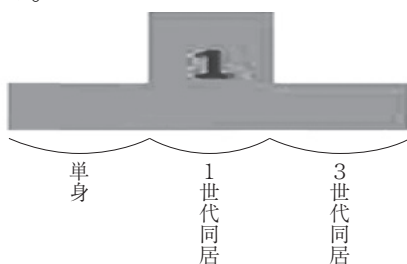
メディアを分類する仕方として受動的・積極的メディアという分類があ

る。例えば、連呼は受動的で、演説会は積極的であろう。以下のメディア中そういう見方が可能な場合はこの分類を入れておいた。

更に、2世代同居のパターンを省いてみている。多くは夫婦のみと3世代同居を挟むような形になるが、そうならない場合もある。現段階で解決が付かないということと、いたずらにパターンを増やし解釈を複雑化するよりも思い切って省略した。

### (1) 1世代同居超高齢者のみ突出する第一パターン

図で示せば次の通りで、データは次のページに示してある。なお、パーセントがあまり違わないところもあるが、20世紀データを考慮に入れたなどが関係している。



説明は、1世代（夫婦）のみ、その情報に積極的に接触し、その他の家族形態者は接触が低いといえるだろう。

9件あるこのパターンが、1世代同居の第一パターンに集中している。他のパターンとでは件数で2倍以上の差がある。又、一緒に暮らしていた配偶者と別れた以降はほとんど共同生活時にやっていたメディア接触をやめていることも推測される。

表によると、突出する「政党演説」(①) (3-11-3%) が、単身・3世代同居は、1世代の伸び方にはおいつかない状況である。以下、文書による選挙運動(②)では、「政党機関紙」(4-9-3%)。「新聞広告」(21-28-23%)もこのパターンに入るわけだが、20世紀データと比較すると、単身者が5%伸ばす中で、1世代同居は15%も減らし、3世代同居

表2 1世代同居のみのパターン

	単身→20C政党演	1世代→20C政党演	3世代→20C政党演	単身→21C政党演	1世代→21C政党演	3世代→21C政党演	単身→20C政党機	1世代→20C政党機	3世代→20C政党機	単身→21C政党機	1世代→21C政党機	3世代→21C政党機	単身→20C新広	1世代→20C新広	3世代→20C新広	単身→21C新広	1世代→21C新広	3世代→21C新広
非	10%	7%	4%	4%	5%	6%	11%	11%	4%	8%	7%	33%	38%	40%	24%	34%	34%	
	(19)	(74)	(114)	(4)	(7)	(20)	(12)	(84)	(174)	(4)	(18)	(35)	(67)	(280)	(611)	(27)	(78)	(182)
前	8%	8%	9%	6%	7%	6%	10%	7%	5%	8%	8%	30%	37%	34%	25%	33%	34%	
	(11)	(64)	(45)	(9)	(66)	(28)	(11)	(79)	(32)	(9)	(91)	(50)	(44)	(301)	(168)	(44)	(404)	(220)
高	9%	8%	6%	3%	5%	5%	9%	8%	9%	8%	9%	8%	29%	36%	37%	24%	31%	28%
	(10)	(29)	(18)	(3)	(21)	(11)	(11)	(29)	(28)	(10)	(42)	(21)	(34)	(126)	(118)	(32)	(156)	(78)
超	3%	4%	3%	11%	3%	8%	11%	9%	4%	9%	3%	16%	43%	26%	21%	28%	23%	
	(1)	(3)	(1)	(6)	(2)	(2)	(4)	(7)	(2)	(6)	(2)	(16)	(15)	(20)	(10)	(18)	(18)	
	単身→20Cピラ	1世代→20Cピラ	3世代→20Cピラ	単身→21Cピラ	1世代→21Cピラ	3世代→21Cピラ	単身→20C揭示ポ	1世代→20C揭示ポ	3世代→20C揭示ポ	単身→21C揭示ポ	1世代→21C揭示ポ	3世代→21C揭示ポ	単身→20C選公	1世代→20C選公	3世代→20C選公	単身→21C選公	1世代→21C選公	3世代→21C選公
非	26%	35%	36%	31%	33%	27%	34%	38%	46%	25%	33%	33%	36%	35%	38%	29%	26%	27%
	(53)	(262)	(556)	(34)	(75)	(143)	(68)	(279)	(712)	(28)	(75)	(176)	(72)	(262)	(579)	(32)	(60)	(140)
前	23%	31%	35%	23%	25%	28%	31%	38%	41%	28%	24%	33%	37%	42%	41%	27%	33%	35%
	(33)	(253)	(173)	(41)	(300)	(179)	(45)	(314)	(202)	(49)	(294)	(211)	(54)	(342)	(204)	(48)	(403)	(226)
高	28%	28%	29%	23%	24%	20%	38%	36%	38%	30%	28%	29%	40%	43%	37%	31%	39%	34%
	(33)	(99)	(94)	(30)	(121)	(57)	(44)	(129)	(122)	(39)	(139)	(81)	(47)	(153)	(119)	(41)	(194)	(95)
超	20%	37%	24%	15%	22%	18%	36%	34%	37%	21%	28%	22%	24%	49%	30%	27%	43%	29%
	(5)	(13)	(19)	(7)	(14)	(14)	(9)	(12)	(29)	(10)	(18)	(17)	(6)	(17)	(23)	(13)	(28)	(22)
	単身→20C新報	1世代→20C新報	3世代→20C新報	単身→21C新報	1世代→21C新報	3世代→21C新報	単身→20Cテ報	1世代→20Cテ報	3世代→20Cテ報	単身→21Cテ報	1世代→21Cテ報	3世代→21Cテ報	単身→20C地域団体	1世代→20C地域団体	3世代→20C地域団体	単身→21C地域団体	1世代→21C地域団体	3世代→21C地域団体
非	21%	30%	29%	29%	30%	29%	42%	45%	43%	47%	41%	45%	3%	3%	4%	1%		3%
	(42)	(223)	(450)	(32)	(68)	(151)	(85)	(335)	(661)	(52)	(93)	(240)	(5)	(20)	(64)	(1)		(10)
前	21%	27%	26%	30%	29%	25%	34%	40%	39%	42%	43%	42%	3%	3%	3%	2%	3%	3%
	(31)	(222)	(129)	(53)	(353)	(164)	(50)	(324)	(192)	(75)	(519)	(272)	(5)	(21)	(16)	(3)	(25)	(15)
高	18%	27%	22%	19%	31%	22%	38%	43%	35%	42%	46%	43%		1%	3%		1%	3%
	(21)	(97)	(71)	(25)	(153)	(61)	(44)	(151)	(112)	(56)	(230)	(119)		(5)	(8)		(5)	(7)
超	20%	17%	24%	17%	22%	17%	36%	34%	39%	33%	40%	36%	8%	3%			4%	2%
	(5)	(6)	(19)	(8)	(14)	(13)	(9)	(12)	(30)	(16)	(260)	(28)	(2)	(2)			(2)	(1)



もあまり変わらず、の中で健闘というわけである。

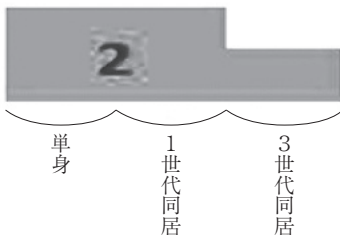
「ビラ」(15-22-18%)。「掲示ポスター」(21-28-22%)では、単身超高齢者の落ち方が15%と極端であるし、家族超高齢者も相当落ちているが、その中で落ち方が一番少ない。

メディアによる選挙情報(③)は、「新聞報道」(17-22-17%)、「テレビ報道」(33-40-36%)。メディアによる選挙運動のほとんどがここに集中している。新聞とテレビだが、テレビが新聞の倍はあろう。表で見ると、1世代同居に限って非高齢者を含めた40%をこす全員の流れに追随することができたわけで、その他の超高齢者は、軒並みに接触率を下げています。逆に、新聞とテレビは、新聞が非高齢者と前期高齢者で、テレビが前期高齢者と高齢者で目覚ましい成長をすることによって選挙運動の様子を一変させているのに対し、さほど単身超高齢者は劇的なメディア政治の変化には加担はしていない。

選管による選挙運動(④)では、「選挙公報」(27-43-29%)。インフォーマルな選挙運動(⑤)では、「地域団体」(0-4-2%)。丁度80歳より若い単身有権者がメディア依存を強めてゆくのにに対し、選管関連の情報は単身超高齢者の依存を示していた。選挙公報が単身超高齢者の3割のアップ(他の層は10近くのダウン)、であった。家族同居の超高齢者も皆多少の下落をこうむりながらもその接触行動を維持している。それよりも1世代同居超高齢者の所帯の選挙公報好きの傾向である。21世紀に若干落とすものそれでも20、21世紀全グループ中第1位の座を維持している。他のメディア関係においても活発に情報接触をするとともに1次集団では情報探査をあまり行わないという、2人(夫婦の場合)孤立を見せている。この2人孤立が配偶者を失い1人になっても同じ1人孤立を貫いているのである。「地域団体」は値が小さいので略。9件。

(2) 1 世代同居と単身者の間が連携する第二パターン

このパターンを図示すると次の通り。



21 世紀に場合を限定すれば、1 世代同居者と単身者との間では、これらのメディアは良く継承されている。対して 3 世代同居は低いままである。「街頭演説」(①) (13-17-8%)。メディアを積極・受動と分けるとすると、街頭演説会は街を歩いていて聞こえるもので、若干受動性が入ってくるが、まだ足を止めて聞くという点で積極性は残る。確かに単身超高齢者は 21 世紀に上がったが、他の超高齢者もパーセントが上がっているなのでその事実を強調しすぎないようにしよう。21 世紀は、1 番が 1 世代同居者で 17% であり、単身者は 13% だったが、単身超高齢者の 4 → 13% という値は、彼らを 9% も引き上げている。3 世代同居者は変わらず 8%

表 3 1 世代同居と単身者の間が連携

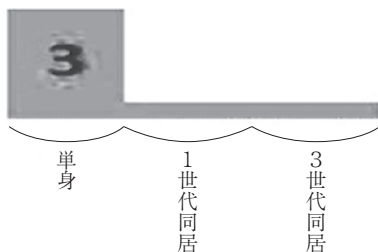
	単身   20 C 街演	1 世代   20 C 街演	3 世代   20 C 街演	単身   21 C 街演	1 世代   21 C 街演	3 世代   21 C 街演	単身   20 C 電話	1 世代   20 C 電話	3 世代   20 C 電話	単身   21 C 電話	1 世代   21 C 電話	3 世代   21 C 電話	単身   20 C 政党文	1 世代   20 C 政党文	3 世代   20 C 政党文	単身   21 C 政党文	1 世代   21 C 政党文	3 世代   21 C 政党文
非	21% (43)	22% (160)	17% (260)	19% (21)	23% (52)	16% (84)	14% (28)	25% (185)	32% (488)	8% (9)	12% (28)	22% (115)	30% (61)	34% (251)	36% (552)	23% (21)	27% (50)	24% (96)
前	16% (23)	18% (144)	14% (70)	16% (28)	15% (187)	18% (116)	17% (25)	27% (222)	27% (135)	18% (31)	19% (227)	19% (123)	27% (40)	31% (253)	33% (161)	24% (35)	21% (211)	20% (101)
高	20% (23)	13% (46)	14% (45)	11% (15)	16% (77)	13% (36)	22% (26)	25% (90)	24% (76)	21% (28)	20% (98)	16% (44)	27% (32)	31% (108)	28% (90)	25% (27)	18% (77)	23% (48)
超	4% (1)	14% (5)	10% (8)	13% (6)	17% (11)	8% (6)	28% (7)	9% (3)	14% (11)	15% (7)	17% (11)	9% (7)	36% (9)	34% (12)	24% (19)	18% (7)	21% (11)	10% (6)

であった。ここでは、単身者と1世代超高齢者に対する長寿変数の促進的機能に注目しておこう。

「電話」(15-17-9%)。「電話」は、20世紀に単身超高齢者のみ高いときがあったが、それを除いてフラットである。電話も受動的なメディアである。単身で電話をとる場合は15%で、21世紀では半分になった。

文書による選挙運動では、「政党文書」(2)(18-21-10%)。3件。

### (3) 単身超高齢者のみの第三パターン



このパターンは、配偶者を失って、何を政治の指針とするかで決まったことが大きい。単身超高齢者だけが突出した受け手となっている。「運動員」(1)(8-3-3)。単身超高齢者から求めるのか、運動体から求め

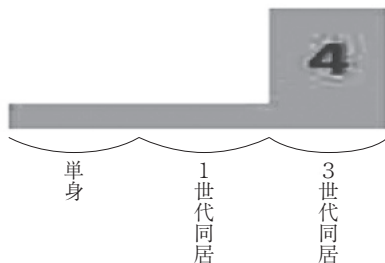
表4 単身超高齢者のみ優位

	単身	1世代	3世代	単身	1世代	3世代	単身	1世代	3世代	単身	1世代	3世代	単身	1世代	3世代	単身	1世代	3世代
	20C	20C	20C	21C	21C	21C	20C	20C	20C	21C	21C	21C	20C	20C	20C	21C	21C	21C
	運動員	運動員	運動員	運動員	運動員	運動員	ラ報	ラ報	ラ報	ラ報	ラ報	ラ報	政テ	政テ	政テ	政テ	政テ	政テ
非	8%	13%	13%	6%	6%	9%	6%	8%	8%	7%	4%	6%	45%	53%	50%	33%	37%	33%
	(15)	(97)	(203)	(7)	(13)	(47)	(12)	(60)	(124)	(8)	(8)	(34)	(91)	(395)	(771)	(37)	(84)	(173)
前	10%	12%	12%	7%	7%	10%	4%	5%	4%	5%	7%	5%	49%	60%	54%	39%	42%	40%
	(14)	(94)	(59)	(13)	(88)	(66)	(6)	(44)	(19)	(8)	(82)	(34)	(72)	(491)	(266)	(69)	(507)	(258)
高	10%	12%	9%	4%	6%	8%	6%	5%	4%	5%	6%	3%	51%	62%	57%	45%	45%	41%
	(12)	(44)	(30)	(5)	(31)	(23)	(7)	(19)	(12)	(7)	(32)	(7)	(60)	(221)	(184)	(59)	(221)	(113)
超	16%	11%	10%	8%	3%	3%	12%	3%	3%	6%		1%	48%	60%	50%	44%	37%	38%
	(4)	(4)	(8)	(4)	(2)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)		(1)	(12)	(21)	(39)	(21)	(24)	(29)

るのか、あるいは相利共生的関係があろう。運動員（やや積極）が訪ねてくるとは、いくら受動的とはいえ、相当選挙が活発なところか、少なくとも受動的とは言えないだろう。20-21世紀、一貫して単身超高齢者が高いようである。

メディアによる選挙情報③は、「ラジオ報道」（6-0-1%）「ラジオ」は、超高齢者になると、テレビなどの文字情報によるより、さらに簡便な聴覚機器になってくるし、常に携帯している場合が多い。選管による選挙運動では、「テレビ政見放送」④（44-37-38%）。政見放送テレビは単身超高齢者の場合21世紀になっても4割のダウンだが、家族同居の超高齢者の場合は等しくそれ以上だが皆ダウンしている。3件。

#### （4） 3世代同居者が主たる受け手となっている第四パターン



これには文書による選挙運動では、「政党広告」（10-11-15%）②が入る。インフォーマルな選挙運動⑤では、「家族」（4-6-26%）で、単身の家族との関係を見ると、20世紀8%で一番少なく、21世紀はさらに悪くなっている。3世代同居超高齢者は20世紀28%・21世紀26%と、ここでは他のすべての集団のうち最大である。

「友人・親戚」（13-6-16%）が入る。友人親戚関係を見ると、20世紀データでは超高齢者は他の3高齢者集団に劣らず選挙情報接触をしているが、21世紀データになると他の2単身高齢者集団にほぼ10%を下回る差をつけて選挙情報の交換をしなくなった。<sup>10)</sup>友人・親戚関係を個別に見た

表5 3世代同居のみ優位

	単身   20 C政党 広	1 世代   20 C政党 広	3 世代   20 C政党 広	単身   21 C政党 広	1 世代   21 C政党 広	3 世代   21 C政党 広	単身   20 C家族	1 世代   20 C家族	3 世代   20 C家族	単身   21 C家族	1 世代   21 C家族	3 世代   21 C家族	単身   20 C友親	1 世代   20 C友親	3 世代   20 C友親	単身   21 C友親	1 世代   21 C友親	3 世代   21 C友親
非	17% (34)	25% (184)	23% (359)	12% (11)	19% (34)	18% (74)	8% (15)	18% (131)	23% (356)	3% (3)	13% (30)	17% (89)	17% (34)	15% (109)	18% (270)	14% (15)	9% (20)	18% (93)
前	17% (25)	21% (170)	20% (100)	15% (22)	18% (180)	14% (71)	6% (9)	18% (149)	23% (114)	6% (11)	11% (137)	17% (113)	19% (27)	13% (103)	15% (76)	24% (42)	14% (168)	17% (110)
高	18% (21)	20% (69)	17% (56)	15% (16)	17% (72)	14% (29)	6% (7)	21% (73)	22% (72)	6% (8)	11% (54)	18% (49)	16% (19)	13% (46)	12% (39)	22% (29)	13% (63)	15% (43)
超	12% (3)	17% (6)	19% (15)	10% (4)	11% (6)	15% (9)	8% (2)	17% (6)	28% (22)	4% (2)	6% (4)	26% (20)	20% (5)	3% (1)	15% (12)	13% (6)	6% (4)	16% (12)

ところでは、やはり友人・親戚との情報交換は家族と同様 20-21 世紀にかけて増えている。3 件。

いずれも、現代のマスコミを中心とした選挙運動からいえば、古いタイプの運動スタイルで、いわば現代になって生じたといえる 1 世代同居、単身者には広まらない。

### (5) 3 世代同居と 1 世代同居が連携する第五パターン



「個人演説会」(①) (4-9-9%)。減っていく場合で、21 世紀に 1 世代同居が増えるが単身超高齢者にかかわらない。3 世代同居は古いタイ

(10) 単身者の職場接触等はほとんど関係が出てないので省略した。

表6 3世代同居と1世代同居が連携

	単身   20 C 個 演	1 世 代   20 C 個 演	3 世 代   20 C 個 演	単身   21 C 個 演	1 世 代   21 C 個 演	3 世 代   21 C 個 演	単身   20 C 近 所	1 世 代   20 C 近 所	3 世 代   20 C 近 所	単身   21 C 近 所	1 世 代   21 C 近 所	3 世 代   21 C 近 所
非	13% (26)	15% (110)	16% (242)	11% (12)	10% (23)	11% (59)	5% (9)	5% (38)	7% (102)	3% (3)	5% (12)	3% (18)
前	14% (20)	14% (112)	18% (89)	15% (26)	13% (162)	14% (90)	7% (10)	5% (37)	6% (30)	6% (10)	4% (49)	6% (39)
高	15% (18)	12% (44)	14% (46)	8% (11)	13% (66)	13% (35)	4% (5)	6% (22)	5% (15)	6% (8)	5% (23)	5% (14)
超	4% (1)	6% (2)	9% (7)	4% (2)	9% (6)	9% (7)			9% (7)	2% (1)	8% (5)	7% (5)

プで増加がありうる。単身超高齢者は個人演説会（積極）にはほとんど行っていない（20、21世紀はおのおの4%）。20世紀にいちばんよく行っていたのが3世代同居超高齢者、次に1世代同居の超高齢期の夫婦、である。この傾向は、世紀を渡ると同じになった。個人演説会は行くものが積極的な努力が必要である。世帯同居超高齢者には長寿変数は維持的機能を果たしている。

「個人演説会」は、メディア時代の運動としては古いのかもしれない。個人演説会が、3世代同居の古いタイプと、1世代同居の現代型に同時に好まれている点は注目すべきだろう。

インフォーマルな選挙運動では、「近所」（2－8－7%）(⑤)。2件。

(6) 何の特徴もない第六パターン



「連呼」(①) (19-19-18%), にみられる。連呼(受動)は, 超高齢者において聞こえる程度が, 20世紀で43-32-21%と下がっていくが, 21世紀で殆どフラットになっていった。文書による選挙運動(②)では, 「葉書」(13-14-13%), メディアによる選挙情報(③)は, 「雑誌報道」(2-2-0%), 選管による選挙運動(④)では, 「ラジオ政見放送」(4-3-1%)。4件。

表7 何の特徴もない

	単身   20 C 連呼	1 世代   20 C 連呼	3 世代   20 C 連呼	単身   21 C 連呼	1 世代   21 C 連呼	3 世代   21 C 連呼	単身   20 C 葉書	1 世代   20 C 葉書	3 世代   20 C 葉書	単身   21 C 葉書	1 世代   21 C 葉書	3 世代   21 C 葉書
非	25% (51)	34% (255)	34% (528)	20% (22)	29% (65)	21% (113)	9% (18)	16% (118)	25% (389)	8% (9)	12% (27)	19% (101)
前	35% (51)	34% (279)	37% (185)	24% (42)	23% (280)	23% (152)	16% (23)	18% (143)	21% (102)	16% (28)	15% (182)	20% (131)
高	32% (37)	38% (136)	37% (118)	29% (38)	23% (113)	23% (64)	14% (16)	19% (67)	16% (52)	14% (18)	16% (80)	16% (45)
超	40% (10)	43% (15)	21% (16)	19% (9)	19% (12)	23% (18)	16% (4)	23% (8)	10% (8)	13% (16)	15% (10)	13% (10)
	単身   20 C 雑報	1 世代   20 C 雑報	3 世代   20 C 雑報	単身   21 C 雑報	1 世代   21 C 雑報	3 世代   21 C 雑報	単身   20 C 政ラ	1 世代   20 C 政ラ	3 世代   20 C 政ラ	単身   21 C 政ラ	1 世代   21 C 政ラ	3 世代   21 C 政ラ
非	6% (12)	7% (43)	7% (100)	11% (12)	7% (16)	5% (27)	10% (19)	9% (67)	9% (135)	5% (5)	5% (12)	5% (26)
前	1% (2)	4% (30)	3% (17)	3% (6)	3% (36)	2% (15)	6% (9)	9% (70)	5% (25)	9% (15)	7% (82)	8% (50)
高	2% (2)	3% (12)	4% (13)	1% (1)	2% (12)	2% (5)	11% (13)	7% (24)	5% (17)	7% (9)	6% (30)	10% (27)
超	8% (2)		1% (1)	2% (1)	2% (1)		4% (1)	6% (2)	5% (4)	4% (2)	3% (2)	1% (1)

## 第四章 超高齢者の争点関心

超高齢者の争点関心は、他の高齢者等と比べて如何なる、特徴を持っているのか、に言及しておこう。これは、「表 8 超高齢者の考慮争点」に掲げている。

### (1) 超高齢者は単一争点派とは単身者にのみ言えること

第一に、<sup>(1)</sup>20世紀では、単身超高齢者は福祉争点を掲げ、2位の1世代に20%の差をつけて1位である。2世代、3世代は50%を切っている。ここでは収入や、働き手の存否による、福祉のニーズによる差が表れている。

しかし、その傾向は21世紀データになると皆殆ど50%台になってしまった。

その原因は、件の長寿変数の働きによるところが大きいだろう。高齢者を見てみると、20世紀に62%であり他の家族形態ではほとんど変わらなかった福祉が、21世紀には73%もの値を示している、一方超高齢者は、<sup>(2)</sup>他の世代家族と変わらないところに落ち着くようになってしまった。つまり、20世紀と21世紀の間に超高齢者のみに有効な長寿変数が働いたのである。

第2位の物価が単身超高齢者で第1位の福祉の半分しかないというのは、以下の世代家族においては言えない。多少の入れ替わりはあるが、1世代から3世代まで30から40%台である。しかし、第3位たる税金争点になると、とくに21世紀になると反応が弱まってくる。言わば第2位までの争点派といえるのだろうか。

(1) 見方、20世紀、横で見ると。次に、21世紀、横。最後に、世紀間比較。

(2) 長寿変数は、超高齢者は80代の超高齢者のみ働く。



表8 超高齢者の考慮争点－福祉・物価・税金・政策は考えぬ・郵政民営化

	単身 ― 20C 福祉	1世代 ― 20C 福祉	2世代 ― 20C 福祉	3世代 ― 20C 福祉	単身 ― 21C 福祉	1世代 ― 21C 福祉	2世代 ― 21C 福祉	3世代 ― 21C 福祉	単身 ― 20C 物価	1世代 ― 20C 物価	2世代 ― 20C 物価	3世代 ― 20C 物価	単身 ― 21C 物価	1世代 ― 21C 物価	2世代 ― 21C 物価	3世代 ― 21C 物価	
非	43% (89)	49% (367)	44% (1876)	40% (606)	51% (67)	40% (101)	45% (901)	46% (265)	52% (108)	54% (405)	51% (2168)	50% (760)	62% (91)	58% (156)	57% (1188)	56% (334)	
前	62% (89)	57% (466)	54% (397)	50% (249)	61% (118)	57% (730)	53% (1059)	54% (361)	55% (80)	52% (425)	53% (385)	48% (235)	60% (117)	53% (673)	58% (1150)	55% (366)	
高	62% (73)	56% (201)	58% (113)	59% (185)	73% (107)	58% (300)	60% (176)	56% (167)	44% (51)	47% (167)	45% (88)	41% (128)	42% (58)	41% (211)	45% (129)	38% (108)	
超	76% (19)	57% (20)	46% (16)	49% (38)	59% (30)	57% (41)	56% (34)	52% (42)	25% (6)	31% (11)	44% (16)	25% (19)	22% (11)	40% (28)	32% (19)	30% (23)	
	単身 ― 20C 税金	1世代 ― 20C 税金	2世代 ― 20C 税金	3世代 ― 20C 税金	単身 ― 21C 税金	1世代 ― 21C 税金	2世代 ― 21C 税金	3世代 ― 21C 税金	単身 ― 20C ― 政策は考 えない	1世代 ― 20C ― 政策は考 えない	2世代 ― 20C ― 政策は考 えない	3世代 ― 20C ― 政策は考 えない	単身 ― 20C ― 政策は考 えない	1世代 ― 20C ― 政策は考 えない	2世代 ― 20C ― 政策は考 えない	3世代 ― 20C ― 政策は考 えない	
非	47% (99)	44% (331)	45% (1921)	42% (644)	46% (61)	45% (117)	45% (905)	43% (248)	13% (26)	10% (78)	10% (418)	10% (153)	21% (26)	9% (21)	8% (145)	6% (34)	
前	33% (48)	39% (314)	42% (309)	32% (160)	29% (54)	34% (430)	37% (718)	33% (220)	9% (14)	9% (76)	10% (71)	12% (57)	6% (11)	4% (46)	4% (69)	6% (39)	
高	22% (26)	36% (131)	29% (56)	30% (93)	21% (28)	25% (127)	26% (74)	22% (63)	18% (21)	12% (44)	13% (25)	15% (48)	11% (15)	6% (32)	5% (13)	6% (17)	
超	24% (6)	19% (7)	43% (15)	25% (19)	19% (9)	18% (12)	13% (7)	11% (9)	16% (4)	11% (4)	27% (10)	35% (29)	21% (10)	12% (8)	18% (10)	19% (16)	
	単身 ― 21C 郵政 民営化	1世代 ― 21C 郵政 民営化	2世代 ― 21C 郵政 民営化	3世代 ― 21C 郵政 民営化													
非	52% (12)	49% (17)	53% (165)	52% (44)													
前	46% (15)	42% (82)	47% (135)	46% (44)													
高	45% (9)	38% (41)	38% (18)	48% (24)													
超	14% (1)	21% (3)		38% (3)													

## (2) その他の争点との関係—争点のよみがえり

ここでは、スペースの関係上第3位争点までしか載せていない。超高齢期を単身者でない全員を含めると、争点のよみがえりがあった（程度においてよみがえりは完全ではないが）ことを確認できるとして、もっと重要なことを指摘しておきたい。

政策は考えなかった人が、20世紀には2, 3世代で約30%前後と伸びているのだが、21世紀になると20%を切るようになり、超高齢者全員が横並びに何かの政策を考慮するようになったことである。この活性化は、長寿変数の働きによることは言うまでもない。

## (3) 特殊な争点

この争点では、超高齢単身者の場合特定選挙の特定争点で取り上げてみた。というのは、この争点では、かなりの調査の回数聞かれている争点項目が掲げてあり、特定の選挙の時だけ問題となったいくつかの争点ははずれてきたからである。この場合、日常的には動きの少ない超高齢者の争点態度をみて即断するより、特定選挙の特定争点を取り上げて判断した方がいいという観点で、郵政民営化問題を取り上げてみた。

ここでは、全超高齢者のうち、世帯を持っている者の方が、多少衰えたとはいえ、自分たちより年下の意識についていくべく努力している様子が良くうかがえる。それだけなお一層、単身者は、「郵政民営化問題からも孤立していること」がうかがえるのである。

## おわりに

(1) 21世紀の長寿変数は、投票率において単身の超高齢者の投票参加を最大にするように作用する。以下すべて21世紀の現象。

(2) 非高齢者と高齢者（3階層）の差異は自民党投票において20歳以上も大きくなり、まるで両者別々の世界を作っているようだ。3世代同居

の人はもともと20世紀からこの傾向をもっていたが、1、2世代同居の人々が21世紀の新たな行動原理として自民党投票を獲得した。単身超高齢者は若干自民党票を減らした。

(3) 政党支持では自民党支持を伸ばし、社会・民主・他で支持を失ったのは、超高齢者の1世代同居者だった。単身者はその逆であった。支持なし層は逆に減っているのだから、超高齢者の自民化と、単身超高齢者層の非自民化とまとめられよう。

(4) 集団加入。「町内会等」は、超高齢者夫婦が残るが単身者と3世代同居は離れていくが、「老人会」がこの2階層を吸収している。

(5) それぞれの超高齢者のコミュニケーション環境としてどのようなものが指摘できるのだろうか。

第1に、1世代夫婦にのみ集中し、その他の所帯形態はこのコミュニケーションにはあまり接触しないというパターンがある。「政党演説」、「政党機関紙」、「新聞広告」、「ビラ」、「掲示ポスター」、「新聞報道」、「テレビ報道」、「選挙公報」、「地域団体」が、主なものである。彼らは政党関係、テレビ・新聞、選挙公報など、選挙の中核を作っているメディアに接触している。

第2パターンとして、これらのメディアを受け継ぐであろう階層は、単身超高齢者であるがどうであろうか。受け継いだメディアは「街頭演説」、「電話」、「政党文書」3件のみである。これも電話を除いて選挙運動らしいが第1パターンで上げたものがいわば本体であるが、忘れたのか、あまりにもさびしい。

第3パターンが単身者だけの突出したものである。「運動員」、「ラジオ報道」、「テレビ政見放送」である（表がない）。これだけのメディアで選挙を判断せよというのか、あまりにもさびしい。

第4パターンは、3世代同居者が主として受けるものだが、「政党広告」、「家族」、「友人・親戚」であり、政党広告を除き普段頻繁に受けている情報であり、もちろん超高齢者の1世代同居者や単身者には遠い対象で

ある。

第5パターンは、「個人演説会」、「近所」であるが、特に演説会に行くものに格別な努力が必要であるという意味で選挙熱心な人々を彷徨とさせる。(第6パターンは省略)。

(6) 超高齢者を全部分析対象とした場合、争点上の値はどうなったか。

超高齢者の「福祉」の値が50%台にそろい、また「物価・景気」がそう下がっているものではなくなり、第二位までの争点派であった。かつ、「政策を考えなかった」というものが減り、超高齢者全体として政策考慮派になっていった。

「郵政民営化」は、1世代同居者から3世代同居までを入れたことで単身超高齢者を分析するより時局的な争点に敏感なことが分かった。

つまり、21世紀になって、単身超高齢者の人たちは一部元気になったが、1世代同居からの流れとしては、コミュニケーション環境等あるいは争点考慮で、その流れを忘れてしまったかのようである。最も理想的な超高齢者は夫婦だけで暮らしている人たちであろう。しかし、どんどん数が減っていつているが、その古典的な行動様式を捨てがたいのが超高齢者で2, 3世代同居の人たちである。

現在は過渡期である。私たちは、その中で忘れられようとしている人々に援助の手を伸ばしてやらねばならない。